

暗闇の中で、私は目を覚ました。

幸せな夢の残骸がじわじわと私をむしばんで、体を起こす気力すら奪っていく。

涙が溢れて枕を濡らした。

「――泣いてるんですか？」

優しい声と、私の涙をぬぐう指に、私はびくりと体を震わせた。

「怖い夢を見た？」

私は答えず、顔をそむける。

だけど顎をつかまれて、顔を無理やり声の方に向けさせられてしまった。

どうせ、私の目には何も映っていない。

ヴィスクに視力を奪われて、どれくらいになるだろう。

一日？ 二日？ 一週間？

光を失ったまま地下室に閉じ込められた私には、時間の感覚すらなくなってしまった。

きっかけは些細なこと。

私がヴィスクを許したこと。

ヴィスクに私を信じさせたこと。

そして、嘘をついたこと。

傷つけるつもりじゃなかった。

ただ、久々に許された一人の散歩が嬉しくて――。

見計らったみたいにふらりと現れたグロウと話して、一緒に逃げようって言われたけど、断って――そのことをヴィスクに隠した。

ヴィスクは私の抵抗を喜ぶけれど、私の嘘を許さない。

その日、いつも通りの穏やかな夜を過ごして、目が覚めると、私は暗闇の中に閉じ込められていた。

泣いても、叫んでも、ヴィスクは私を許してはくれなかった。

私はこの埃っぽい地下室で、太陽の暖かさや、吹き込む風の穏やかさを感じる自由すら取り上げられてしまった。

「おいで。食事の時間です」

「食べたくない」

「そう言つて、昨日も何も食べなかったじゃないですか。このままだと、鼻から胃まで管を通して、食べ物を流し込まないといけなくなる。あまりおすめはできません。すごく苦しいみたいですから」

私は泣きながら、握りしめた拳を声に向かって振り下ろした。

だけど拳はどこにも当たらず、むなしく空をかいてベッドに落ちる。

「好きにすれば……？　もう、好きなだけ私のことおもちゃにすればいい。私が死ぬまでそうすればいい……！」

「オーリ……どうか、そんな風に思わないでください。おもちゃになんてしません。君は僕の宝物なんだ。だから、ほかの連中に触れさせたくないんです。君が僕以外の誰かを見るのも、僕にはもう耐えられない」

「だから、グロウとはちよつと話したただけだって言ってるじゃない！　ヴィスクと仲良くやってるから、心配しないでって伝えただけなのに……！」

「どうして、そんなことをわざわざ伝える必要があるんです？　勝手に心配させておけばいい。何を伝えたところで、あいつはどうせ信じない。僕から君を奪うためなら、なんだってする男だ」

ざらりと、ヴィスクの指が私の唇をなぞる。

続いて、暖かくて湿った感触があつて、それがヴィスクの舌だと気づいた私は、必死に顔をそむけた。

だけど結局舌は私の口の中に入り込んできて、喉の奥まで蹂躪される。

たつぷりと時間をかけたキスから解放されて、私は泣いた。

「ヴィスクよりはマシだもの……少なくとも私を閉じ込めて、変な薬使ったり、目を見えなくさせたりしないもの！」

「では、認めるんですね？　グロウと逃げるつもりだったのだと」

「そうじゃない！　そうじゃないでしょ……!!？」

ほとんど叫ぶように私が言うのと、急にヴィスクは静かになった。

離れていく体温に不安になって、私は遠ざかる足音に向かってそつと両手を伸ばす。

「ヴィスク？　どこいくの？」

「もし、君が本当にグロウと逃げる気がなかったのなら……君はあの男を無視すべきだった。だというのに君は、あの男と並んで歩いて、手を取り合つて笑い合つていたそうじゃないですか」

「それは……」

「僕よりグロウを選ぶなら、どうしてわざわざ僕を許すふりなんかしたんです？　ドアのカギは開けておいた。もうずっと、君が逃げられる準備は整っていたのに、わざわざ結婚なんて甘い言葉で僕をからかつて……間抜けに信じて喜ぶ僕を見て笑っていたんですか？　僕が一番求めていたものを与えてから取り上げるのが、君の復讐？　お見事です。効果は絶大だ」

「違ふよ、ヴィスク……違ふ……私、本当に——」

戸棚を開ける音。

閉める音。

ヴィスクの足音が戻ってくる。

腕をつかまれて、私は立ち上がった。

「何……？」

「壁に手をつけて立ちなさい」

「でも……」

「逆らうたびに、鞭を一回増やします」

鞭？ と聞き返す間もなく私は壁際に押しやられ、ほとんど突き飛ばされるような形で壁に両手をついた。

背後にヴィスクが立つ。

「十回打ちます」

鞭が風を切る音が、私の鼓膜に爪を立てる。

バシン！

熱いような痛みが背中中走って、私は叫んだ。

「痛い！ やだ……！！」

「ダメですよ、動いたら。ほら、壁に手をつけて」

「やめて！ お願い、嫌……！！」

「二回逆らったので、十二回ですね」

「なんで……」

「十三回」

私は唇をかみしめて、弱弱しく壁に両手をついた。

二回目の鞭が私の背中を打つ。

三回、四回——回数が増えるたびに痛みが増して、壁についた両手を握りしめた。

食いしばった歯が痛くて、冷や汗がしたり落ちる。

この人は、どんな顔をして私を鞭で打ってるんだろう。

私が何も悪いことをしてないって、ヴィスクがわかっていないはずがない。

五回、六回、七回——涙が溢れて、口の中に入り込んでくる。

八回目の鞭で、私は立っていられなくなって膝から崩れた。

痛い、痛い、痛い——。

「立ちなさい」

「ヴィスク、お願い……もうやめて……痛い……」

「服の上から打っているだけなのに、そんなに痛いはずがないでしょう。子供でももう少し我慢できますよ？ 同情を誘おうとしても無駄です。ほら、立って」

私はのろのろと立ち上がる。

残りの鞭を私の背中に振り下ろし終えて、ヴィスクは私を背中から抱きしめた。

「これは嘘の罰です。鞭で打たれるのが嫌なら、君は正直にならなければ。——グロウと逃げるつもりだった。そうでしょう？」

「……違う」

「オーリ」

「本当に違うもの！ ヴィスクがどんなに疑ったって、鞭で打ったって、閉じ込めたって、私はただ昔の知り合いと偶然会って話しただけ！ ヴィスクのことを許したのも、結婚していいって言ったのも嘘じゃない！」

「オーリ……」

「でも、こんなことするヴィスクは嫌い……大嫌いだし、もう二度と許さない！」

私が泣きながら叫ぶと、私を抱きしめる腕の力が強くなる。

おしりのあたりに硬いものを感じて、私はぞっとした。

「……嫌」

「君はいつも、僕が信じたくなるような嘘をつく。信じないようにするのに、僕はいつも苦労させられます。——でも、今は信じましょう。君は僕が嫌いだし、僕を二度と許さない。やっと素直に言ってくれましたね」

「ヴィスク、いや……お願い、嫌あ……」

ヴィスクの指が、私のブラウスのボタンをはずす。

着ているものをすべてやすやすとはぎとられ、鞭打たれて熱をもった私の背中にヴィスクの舌がゆるゆると這った。

自分で鞭を振り下ろしたくせに、いたわるような、慰めるようなその行為に、私はどうしたらいいのかわからなくなる。

私を抱きすくめるヴィスクのにおいと体温が、たった数日しか続かなかった夢のように穏やかな日々を、私に思い出させた。

痛くて、つらくて、苦しくて、悲しいのに、お腹の下の方がじくじくとうずいてたまらない。

気づかれたなくて、私はぴたりと足を閉じて拒絶を示した。

ただヴィスクの指が私の太ももをそっと撫でると、食いしばった唇の隙間からこらえきれず吐息が漏れる。

背後から、失笑が私を顰めた。

「感じてるんですか？ 視力を奪って、地下室に閉じ込めて、鞭を打って服をはぎ取った男に対して？」

「か、感じてない……」

「そう。じゃあ、君がまた嘘をついていないかどうか、確かめてみましょうか」

ヴィスクの大きな手が私のおしりを優しくなでて、必死に足を閉じてるのに、長い指がやすやすと足の間にもぐりこんでくる。

とつくに濡れている入り口を、ヴィスクの指がゆるゆると前後に這うと、くちくちと淫猥な音が地下室に響いた。

足を閉じていると、指の動きが苦しいくらい強く感じられて、どうしても耐えられなくて私は足を少しゆるめた。

そうすると、あつという間にヴィスクの指が私の体の深くまで入ってきて、私はそれだけで軽く達してのけぞった。

「ほら……やっぱり君は嘘つきだ」

ヴィスクの低く、責めるような声が耳朶を舐める。

耳たぶに甘く歯を立てられて、私はそれを嫌がって顔をそむけた。
ぐじゅぐじゅと、下品な水音が地下室に響く。

その音に私の声が混じって、ヴィスクの呼吸だけが静かに落ち着いている。

それが、どうしようもなく恥ずかしい。

感じたくないのに。

怒りと苦痛に溺れていたいのに。

羞恥と快楽が私の暗闇を染めていく。

「やめて……」

私は懇願した。

「お願い、やめて……お願い……お、ねが……指、や……いやああ……！」

膝が、がくがくと震える。

立っていられなくなつて、私は床にへたへたと座り込んだ。

ベルトを緩める音がして、ヴィスクが私の背後で膝立ちになる。

私は壁に押さえつけられ、腰を深く抱え込まれた。

無言のまま、ヴィスクが私の奥まで押し入ってくる。

壁とヴィスクの体に挟まれて、私は少しも動くことができない。ヴィスクが腰をゆするたびにゴツゴツと一番深いところがえぐられて、私は泣き叫んだ。

それだけでも苦しいのに、ヴィスクは動けない私の体をまさぐって、敏感になった全身を執拗に責め立てる。

「あ、ああ……や、いや……！ ひ、あ……これ……やだ……やだ、やだ……！」

私は壁を殴って、体を反らし、どうにかヴィスクに与えられる快楽から逃げようともがいた。

だけどヴィスクの押し殺した失笑がこぼれるばかりで、私は悲鳴とよだれを垂れ流しながら、体を引き裂くような絶頂にさらされ続けることしかできない。

顎をつかまれて、だらしなくあえぎ声を上げ続ける私の唇に、ヴィスクに唇が重なった。口腔から引きずり出された舌を強く吸われ、私は視界を白く焼く絶頂に全身を引きつらせる。

合わせた唇の隙間から、ふ、とヴィスクが苦しげに息を吐いた。

そうするとヴィスクの腰の動きが激しくなつて、肉を打つ音が、ねばっこい水音に混ざり始める。最後に数度、貫くような強さで奥をえぐられて、じんわりとお腹の奥にあたたかさが広がった。

解放された唇の先で乱れた吐息が混ざり合い、私は泣きながらヴィスクの首に縋ってキスの続きをねだる。

ヴィスクはそんな私を抱きよせて、自分の膝の上に座らせた。

まだつながったままの私たちは、お互いの動きに合わせてまた腰を揺らし始める。

「嫌い……嫌い、嫌い……大嫌い、大嫌い……っ……っ……！」

泣きじやくりながら、私はヴィスクに形ばかりの拒絶を吐いた。

私の耳元で跳ねるヴィスクの吐息は、熱く湿って苦しげだ。

泣いてるんだ。

この人は私を鞭打って、凌辱しながら泣いている。

それを思うと私もつらくて、悲しくて、それなのに嬉しくなった。

かわいそうなヴィスク。かわいそう。

もっと苦しめばいい。

私をもっと苦しめて、そのたびに泣けばいい。

「うあ……！！ あ、ああ……！！ や、だめ、おく……奥、や……奥、やだあ……」

私はヴィスクの首に縋って、容赦なく爪を立てた。

ヴィスクの肩が痛みに震えて、かすれた声で、囁くように、誰にも聞こえないでくれと願うように「愛してる」と繰り返す。

苦痛にうめいて、ヴィスクはまた私の中で、嫉妬と猜疑心の塊みたいな汚らしい欲望を吐き出した。

つながりあったまま、私とヴィスクは床の上でぼんやりと抱きしめ合っている。

「……私、自殺するよ。ヴィスクがいないときに」

私のささやきに、ヴィスクは私を抱きしめる腕に力を込めた。

「させませんよ、そんなこと」

「どうやって？ ずっと私のこと、見張ってる？」

「眠らせます。君が二度と目を覚まさないくらい深く」

私は弱々しく笑った。

涙が溢れて止まらない。

そっか。やつぱりそうなんだ。

「私、目を覚まさなければよかった」

「オーリ……」

「こんな風になりたくなかった。ヴィスクのこと、好きなままでいたかった……」
好きだった。

私は本当に、ヴィスクのことが好きだったのに。

だから孤児院に残ることを選んだのに。

だからグロウを拒絶したのに。

「グロウにさらわれちゃえばよかった……！」

ぱたぱたと、私の肩にぬるい液体が降ってきた。
ヴィスクの涙だ。

何も言ってくれないまま、ヴィスクは私を抱き上げて、ベッドにそっと横たえた。

「背中、痛い」

私はごろりとうつぶせになる。

むき出しの背中にヴィスクはトロリとした薬を垂らして、少しも協力する様子を見せない私に苦も無く包帯を巻き終えた。

私は枕を抱えて、気まぐれに私の髪を撫でるヴィスクの指を感じながら、穏やかな子守唄に目を閉じる。

「ヴィスクは死んじやだめだよ」

あくび交じりに、私は言った。

これは私がヴィスクにあげる、一番の憎悪で、一番の呪いだ。

「私が二度と目を覚まさなくなっても、私が自殺しちゃっても、ヴィスクだけは死んじやだめ。一生後悔して、死ぬまでずっと苦しまなくちゃ許さない」

「――苦しみますよ、死ぬまでずっと」

「そっか」

私は笑った。

「じゃあいいよ。いくらでも私のこと苦しめて」

「オーリ……」

「お休み。私の王子様」

そして私は眠りに落ちた。

どうか二度と目を覚ましませんようにと祈りながら。